

Title	Gillian Sankoff, The Sociology of Language, 1980
Author(s)	細川, 弘明
Citation	言語学研究 (1982), 1: 110-112
Issue Date	1982-12-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/87889">http://hdl.handle.net/2433/87889</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 書評

Gillian Sankoff,

The Sociology of Language, 1980, University of Pennsylvania Press.

Paper-bound US\$12.00—/Hard-bound US\$35.00—

細川弘明

言語学の現在において、特定のパラダイムに固執することが研究上はたして有益な事なのか、という問題意識をもっている（あるいはおぼろげながら感じている）言語学者は、決して少なくない筈である。しかし現に研究成果を提示するにあたって、パラダイムの軛から自らを開放することに成功している言語学者となると、その数はきわめて限られてくるだろう。多くの研究者たちは、あるひとつの理論規範を、あたかも許婚者を選ぶかの如く択一的に選び、それに帰依することによって（あるいは、既存のパラダイムを拒否したとしても、その代案として提出する別の枠組でもって自らを呪縛することによって）問題の発見および解決の範囲をいちじるしく限定するのである。私たちは現代言語学のこのような禁欲的なあり方に慣れてしまっているのです、特定のパラダイムにとらわれない自由な戦略を駆使する人の仕事をなにか胡散臭いものだと見てしまいがちである。近代以降の言語学という学問は「方法における秩序」に異常な関心をよせ続けてきた分野であり、その意味では、パウル・ファイヤーベントが主張するような「方法論的アナーキズム」とは対極をなすような空気に満ちているのである。

ところが、パラダイム保守にこだわらない学問展開を逞しく実践している数少ないアナキーな言語学者として、実に皮肉なことだが、現代言語学における最も強力なパラダイムを提出した当の本人であるチョムスキーの名を挙げることができる。周知のように変換生成文法（TG）の枠組は、わずか二十数年のあいだに度重なる修正・変革をへて今なお流動的な状態にある。今日、文法理論の解決すべき問題が、当初のTGパラダイムの中に示された範囲をすでに超えてしまっていることは、生成文法家たち自身の認めるところである。したがって「TGパラダイム」といわれるような方法枠は、この言葉が生成文法家の著作によくあらわれるという事実とはうらはらに、実はもはや存在しないと考えたほうがあっている。「理想的な共同体における理想的な話し手」なる想定は、それ自体はパラダイムではなくて、パラダイム以前の公準、いわば約束事にすぎない。

さて、そうすると、この「約束事」を批判することのある意味では出発点としている現代の社会言語学の理論的な位置が問題となる。もし、生成文法の公準を採用しない、といった程度のネガティブな定位しかできていないとすれば、社会言語学者たちはTG論者たち以上に“パラダイム・ロスト”な状態で突っ走っているという事になりかねない。ハイムズの提唱する「伝達能力」とか、ラボーヴの提唱する「秩序づけられた可変性」のように、あらたなパラダイム建設のころみは勿論あるのだが、それがややもすると問題解決の範囲を小さくしてしまう危険性をはらんでいるとい

う事はすでに述べたとおりである。しかし、社会言語学の理論状況が統一のとれていない状態にあるとしても、そのこと自体はさほど嘆くべきことではないのかもしれない。むしろ逆に、フैयाーベントが主張するような「方法論的アナーキズム」を発揮する余地がそこにはあると考えるべきである。

ジリアン・サンコフはこの意味において現代社会言語学の最も良質でしかも前衛的な部分を代表する研究者である。彼女ほど、フィールド・ワークにもとづいた具体的な言語資料の詳細な分析と、言語一般に通じる理論的な説明とを一体化させている言語学者は、他にそう多くはいない。彼女はハイムズやラボープのたてたパラダイムを出発点としつつも、必要に応じてさまざまな概念枠組を駆使しており、自由闊達な知性を感じさせる。方法論的に多様な戦略をとりながらも、彼女の仕事の基調には、計量的手法と歴史的視点という2つの特色がある。つまりサンコフ女史は、言語の話者を個人としてではなく集団として捉え、その発話行動の共時的な変異を量的におさえることによって、その背景をなす微通時的な変化(たとえば2~3世代間の変化)の過程を実証的に映し出すことに成功しているのである。

さて本書には、サンコフ女史がちょうど1970年から80年にかけて発表した論文15篇が収録されている。初出は、Language, American Anthropologist, Syntax and Semantics など手にいれやすい刊物に載ったものが多いけれども、あらためて本書のようなまとまった形で女史の一連の著作に接することができるようになったのは歓迎すべきである。価値ある一冊といえる。本書は2部にわかれ、第I部には、多言語社会(主にパプア・ニューギニアの事例)をマクロな目でとらえた仕事を中心に9篇が収められている。夫君Davidとの共同執筆になる一篇を除いて、すべてサンコフ女史の単独執筆である。第II部は、個別的な言語現象をミクロに記述した論文6篇。事例はパプア・ニューギニアのいわゆるネオ・メラネシア語(Tok Pisin)とモンリオール(ケベック)のフランス語が取扱われる。第I部とは対照的に、一篇を除いてすべてが他の女性言語学者との共同執筆の形をとっている。内容一覧(1~15)はあとで挙げるとして、第I、II部から各一篇ずつとりあげて簡単な論評を加えておこう。

第7篇は地理的に隣接する諸言語の語彙の一致・不一致の問題を理論的にとらえ直したものの。言語が方言分化する際、語彙の継承と改新・借用といった因子の絡み具合を、いくつかのアルゴリズムを用いて数理的に想定実験している。基礎語彙100語における同源語保有の率をとりあげているが、単なる語彙統計学的な処理とはひと味ちがい、数理的な想定と現実のデータとのくいちがいをめぐって、示唆にとむ内容の議論を展開している。わずか9ページの論文だが、理論的には中味が濃く、重大なテーマをあつかったもの。初出はCahiers de l'Institut Linguistique de Louvainの3巻5-6号である。

第11篇はピチン言語で関係節補文構造が出現する過程とその変異を具体的に分析したもので、Language 52巻3号に初出の論文。主語と述語のあいだに埋めこまれる補文を主に取りあつかつて、とくに補文標識のあらわれ方の変異と、補文中の代名詞—主文の名詞句(つまり先行詞)と同一指示—の問題を論じている。ネオ・メラネシア語(Tok Pisin)が関係補文の標識として、WH-COMPよりもむしろ、英語hereに由来する*ia*というdeicticな小辞をCOMPにとる形を発達さ

せていることは、一般言語学的にみても注目に値する。また、補文中に先行詞をコピーした代名詞があらわれるのは印欧語の一部にも見られ、補文構造の文法的な説明を考えるうえでも興味深い現象である。本篇は分析者による内省ではなくて、フィールド・ワークの実地資料にもとづいて頻度や年齢分布なども考慮にいれているため、論考に共時的通時的な深みを感じられる。制限・非制限関係節の区別についての見解に若干の疑問を感じるどころ(例えば pp. 243 f)はあるけれども、全体的には論のすすめ方が明晰で理にかなっており、長い論文であるにもかかわらず、一気に読むことができる。なお、本篇の共同執筆者 Penelope Brown は、社会言語学の中でも主に語用論的な色彩のつよい分野で注目に値する仕事をしている女性言語学者である。

本書の内容は次のとおり：

序文(デル・ハイムズ)

#### 第I部 社会的歴史的空間における言語

1. パプア・ニューギニアにおける政治権力と言語的不平等(1976)
2. 多言語社会における言語使用(1971)
3. 伝達能力研究のための計量的パラダイム(1974)
4. 音韻論のレベルを超えた変異規則(1973)
5. パプア・ニューギニアにおける多言語使用(1977)
6. 相互通解可能性・2言語使用・言語間の境界(1970)
7. 語彙の類似に関する波状説理論対樹状説理論(D. サンコフと共著, 1976)
8. 認知上の可変性とニューギニアの社会編成 — ブワン族の親族集団 Dgwa (1972)
9. 認知モデルの共有と変異に関する計量的分析(1971)

#### 第II部 特定の言語変数に関する個別研究

10. 言語が話者たちの母語となるまで(S. ラベルジュと共著, 1973)
11. 談話の流れにおける統語法の起源(P. ブラウンと共著, 1976)
12. 言語と文化における可変性の説明(1976)
13. 何でもあなたのできること(S. ラベルジュと共著, 1979)
14. モントリオールの口語体フランス語における *ne* の用法にみる生産性(D. ヴェンサンと共著, 1980)
15. モントリオールのフランス語における助動詞 *avoir* と *être* の交替(P. ティボーと共著, 1980)

以上15篇。12と13の初出刊行年は本書には示されていないが、評者の調べたかぎりでは上記のとおりである。なお、本書評で言及した「方法論的アナーキズム」については、P. K. ファイヤアーベント著『方法への挑戦』(村上陽一郎・渡辺博=共訳, 新曜社, 1981)および『自由人のための知』(村上陽一郎・村上公子=共訳, 新曜社, 1982)を参照のこと。